

宮崎汎会員が見た世界の旅第3部第19話

歴史を見つめるウェストミンスター寺院

2022年9月8日、大英帝国に70年間君臨し、国民の敬愛を一身に集めてきたエリザベス二世女王陛下が逝去された。

ウェストミンスター寺院で厳かな国葬が営まれその模様は世界に中継された。TVの画面を見つめながら戦中派の一人として、一つの時代が終わったことを強く感じたものである。

ウェストミンスター寺院は首都ロンドンにあるゴシック様式の壮大な大聖堂である。創建は7世紀に遡るが、13世紀英国王ヘンリー3世によって完成した。

その後増改築がなされ18世紀に現在見る形となった。大聖堂と道路を隔てたところに正式名称はウェストミンスター宮殿、通称ビック・ベンと呼ばれているイギリスの国会議事堂が寺院に寄り添うように建っている。



スモッグですすけている
ウェストミンスター寺院

ウェストミンスター寺院は11世紀以来、イギリス国王の戴冠式ならびに埋葬式が執り行われてきた。寺院内の壁面や床は、王族をはじめとする政治家・学者・作家や芸術家など、歴史に名を刻まれている人たちの墓碑や記念碑で埋まっている。

そこにはカンタベリー物語の著者であるジェフリー・チョーサー（1343年～1400年）、作曲家ゲオルグ・フリードリッヒ・ヘンデル（1685年～1759年）、万有引力のアイザック・ニュートン（1642年～1727年）、進化論のチャールズ・ダーウィン（1809年～1882年）、詩人のアルフレッド・テニソン（1809年～1892年）、暗黒大陸と呼ばれていたアフリカ大陸をヨーロッパ人として初めて横断した探検家ディヴィット・リヴィングストン（1813年～1873年）、二都物語やオリバーツイストで知られる小説家のチャールズ・ディケンズ（1812年～1879年）、ジャングルブックなどの著者ジョセフ・ラドヤード・キップリング

（1865年～1936年）、首相を務めたクレメント・アトリー（1883年～1967年）など、そうそうたる人物の名が並んでいる。

ウェストミンスター寺院はテムズ川の岸辺で何世紀にもわたってイギリスの歴史をじっと見つめ続けて来たのであろう。

イギリス人と言えば、鉄の女サッチャー首相やザビートルズの名を挙げる人もいるが、多くの人は、葉巻をくわえたウィンストン・チャーチルの顔をまず思いうかべる。

サー・ウィンストン・レナード・スペンサー・チャーチル（1874年～1965年1月24日）は、イギリスの陸軍軍人、政治家であるが、1953年にノーベル文学賞を受賞するなど作家や画家としても一流である。

チャーチルは軍人としてスタートを切ったが25歳で政治の世界に入り、通商大臣、内務大臣を務

め第一次世界大戦時には海軍大臣、軍需大臣となり、植民地大臣の時にはユダヤ人をパレスチナへ移民させたことで知られ、次いで財務大臣を歴任している。

第二次世界大戦時には海軍大臣を経て1940年5月、チェンバレンから引き継いでイギリス首相に就任し、第二次世界大戦を勝利するまで連合国側のトップとして剛腕をふるった。

第二次大戦下、ヨーロッパはナチスドイツの台頭によって蹂躪された。諸国はナチスドイツに占拠され国の尊厳を冒される苦渋に満ちた忍耐を強いられた。



ジョージアにあるスターリン記念館の写真から、左三巨頭のヤルタ会談・右ポツダム会談

このような状況下においてイギリスの首相は、1940年5月チェンバレンからチャーチルにバトンが渡ったのである。

破竹の勢いで進撃するナチスヒットラーは、イギリス上陸を目論んだが果たせなかった。チャーチルが徹底抗戦の姿勢を示したからである。結果的には侵略を続けるドイツ軍にストップをかけることとなった。

1943年11月カイロでチャーチル・ルーズヴェルト・蒋介石の3国首脳会談が開かれ、対日諸条件が話し合われた。その直後テヘランでチャーチル・ルーズヴェルト・スターリンの三巨頭の会談が行われた。

1945年2月ヤルタ会談では三巨頭によってドイツの無条件降伏、ナチス組織の根絶、国際連合設立のためのサンフランシスコ会議の招集など重要事項について話し合われた。

そして1945年7月・8月、三巨頭によるポツダム会談が開かれ、日本の無条件降伏、ドイツに関する諸問題の最終決定がなされたのである。

チャーチルはナチスドイツから国を救った救国の士であるが、イギリスは彼のナポレオンの侵攻を打ち砕いたもう一人の英雄ネルソン提督を忘れてはいない。



ネルソン提督の円柱

ホレーショ・ネルソン（1758年～1805年）は、アメリカ独立戦争にも従軍した軍人である。ネルソンは常に戦いの先頭に立ち戦闘中の負傷により右目を失い、さらに右腕を失う重傷を負った。ネルソンはイギリス海軍提督としてナポレオン率いるフランス、スペインの無敵艦隊をトラファルガー海戦で打ち破り、ナポレオンのイギリス侵攻を食い止めた。そしてこの後イギリスは制海権を握ったのである。だが残念なことにネルソン自身はトラファルガー海戦で狙撃され栄光に満ちた生涯を閉じたのである。ロンドン市内のトラファルガー広場は、市民の憩う大きな広場でその中心には日本橋の三越本店入口にあるライオンのモデルとなったライオン像を従えた高い円柱がそびえている。その頂には

ネルソン提督像がイギリスを睥睨している。

イギリス君主の戴冠式は1000年も続く伝統儀式で、2023年5月6日にはイギリスのチャールズ新国王の戴冠式がウェストミンスター寺院で行なわれ、戴冠式をもって国王は即位することとなる。各国の元首・王族等が列席する戴冠式は、エリザベス二世女王以来およそ70年ぶりに行われる英国の国家行事である。

余談であるが、横浜には帆船日本丸が保存され人目を引いている。何度か訪れ優美な船体を見上げているうちにすっかり帆船に魅せられてしまった。



帆船カティーク

日付変更線のあるロンドン郊外のグリニッチには、19世紀に建造された快速帆船“カティーク号”が係留されていることを知り一目見んものと公務の傍ら出かけた。見上げた船体は漆黒で、まるで精悍なクロヒョウを思わせる趣でしばらく見惚れた。

カティークが建造された当時は一刻も早く中国から紅茶を搬送するティークリッパー（＝茶を運ぶ大型帆船・快速帆船）として建造されたものである。イギリス人は紅茶にひどくこだわる。

アメリカが本国イギリスから独立する切っ掛けはボストン茶会事件と呼ばれる茶に関する法律を、イギリス本国が制定したことが発端であった。イギリスは今に至るもティータイム、

アフタヌーンティと茶の文化が生活に根付いている国である。